

リーダーなら知っておきたい

米国史から 日本が学ぶべきもの

神藏孝之

■ 目 次 ■

アメリカの多面的要素や政治的複雑性を理解すべき	3
(1) アメリカ社会の複雑性	7
— アメリカの全体像をつかむうえで理解すべき「いくつもの顔」	
戦前日本の優れた知米家たち	7
原敬が暗殺されたときのアメリカの大統領は誰だったのか	13
(2) アメリカの起源と南北戦争	18
— 南北戦争は奴隷解放のためではなく利害の対立	
アメリカ建国の起源	18
急速な領土拡大とその背景	21
南北戦争によってアメリカは次の時代に入っていく	23
(3) 産業革命と帝国主義の始まり	25
— 中国を新たな標的としたアメリカ帝国主義時代の始まり	
南北戦争後の驚異的な経済発展	25
鉄道網の発展と西部開拓	28
アメリカ帝国主義時代の始まり	29
(4) アメリカの「もう一つの顔」	31
— アメリカの「もう一つの顔」はハートランドにある	
「自国第一主義」と「常態への復帰」	31
狂騒の20年代から世界恐慌へ	33
ハートランドに見るアメリカの「もう一つの顔」	35
米中のはざまの中で生きていくには相当な知恵が必要	37

アメリカの多面的要素や政治的複雑性を理解すべき



柳川 範之

東京大学大学院経済学研究科・経済学部 教授

これからの社会において必須となってくるのは、複眼的思考ではないだろうか。SNSが全盛になっている今の状況では、どうしても単線的で直接的な、わかりやすい結論だけが取り上げられたり、拡散されたりしがちだ。しかしながら、国際政治、国際経済情勢は、ますます複雑な状況になってきている。たとえわかりやすく見える事柄であっても、その裏側には、もっと複雑な事情があったり、多面的な理解が必要な内容があったりするのではないか。そうであれば、もっと物事を異なった角度から、さまざまに検証する複眼的思考がより重要になってくるはずだ。

特に、アメリカ合衆国のように、そもそも、一筋縄ではいかない多民族国家をしっかりと理解しようとするならば、わかりやすい主張を鵜呑みにしたり、一部分だけを見てすべてを理解した気になったりするのとは、とても危険だろう。本稿でも「アメリカは大国なので、顔は一つではありません。」と書かれているように、アメリカの多面的要素を、もっと正しく、多面的に理解する必要がある。

われわれは、よく「アメリカは」という言い方をして、アメリカ合衆国を、一つのまとまったかたまり、一つの意思決定主体として、単純に捉えてしまいがちだ。しかし、「合衆国」であるアメリカを理解するうえでは、その合衆国的な側面、複雑で多面的な要素について、しっかりと個々の情報を収集し、その多様性を分析する必要があるのだろう。

人種によっても、所得階層によっても、地域によっても、かなり多様な顔を見せるアメリカ。ましてや、その国がわが国にとって、とても大きな影響を与えている国であるとするならば、われわれは、多面的なこの国に対する理解を、もっと深めていく必要がある。

本稿は、そんな問題意識に応えてくれるものだ。一面的な理解ではなく、アメリカという国の多面的な側面をしっかりと浮き彫りにしている。そして、本稿の大きな特徴の一つは、その多面的な要素を、アメリカの大掴みの歴史をたどることで明らかにしている点だ。

大きな軸は、領土拡大の変遷である。東部から、中部・西部へと領土を拡大していくプロセスをたどることで、各地域の違いを浮き彫りにするとともに、地域間の対立構造等を説明していく。

また、その説明を通じて、地域間の違いだけではなく、南北戦争とはどのようなものだったのか、工業化を通じて、世界の大国へと変貌していく姿も、わかりやすく解説されている。

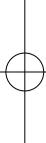
そこでは、リンカーン、ウイルソン、ルーズベルトといった歴代の大統領を軸として、説明が展開されているが、本稿が大きく焦点を当てているのが、1921年に就任しているアメリカ第29代大統領、ウォレン・ハーディングである。なぜなら、「トランプの祖」という形容詞で説明しているように、本稿の焦点の一つは、このハーディングとトランプの類似点を指摘することであり、そこから、現代



への大きな示唆を得ようとするものだからである。このハーディングとトランプの経歴その他の類似点比較は、とても興味深いものだ。

地理的な側面に関しては、ハーディングもトランプも強い支持を受けていた、ハートランドというアメリカ中西部の地域に着目している。「ここが本来アメリカのある種の中心部」と書かれているように、アメリカを理解するうえでは、この地域を正しく理解することが必要だと強調されている。

これから行なわれる大統領選挙の結果次第では、トランプが大統領に返り咲く可能性も指摘されている今は、トランプとその支持者を正しく理解するうえで、この点はとても重要な指摘であり、視座だろう。



もう一つの、かつ重要な本稿の軸は、このようなアメリカ史に関する説明の中で、日本人のかかわりを説明している点である。もっといえば、日本の政治家がどのようにアメリカの情報収集に努め、アメリカを理解していたかに着目している点に、本稿の大きな特徴があり、かつ主眼がある。

その代表的な登場人物は、原敬であり、洪沢栄一や高橋是清である。本稿によれば、原敬は「伊藤博文、西園寺公望に続く3代目の立憲政友会の総裁で」「1900年頃から実質的には切り盛りしているが、「1908年から1909年にかけて、官費ではなく私費でアメリカを中心に見に行」く。世界の超大国になっている今のアメリカを見に行っただのであれば、それは比較的わかりやすい話だろう。しかし、その当時のアメリカはまだまだそのような状況にはなかった。

けれども、そのようなアメリカをつぶさにみたことによって、「その結果、『20世紀はアメリカの時代になる』と彼は確信した」と書いているところに本稿の大きな着眼点と主眼を感じる。

それぞれの国の内情をしっかりとした細かい粒度で観察し、情報

を得ること、そのことの重要性を本稿は指摘している。

今は、SNSやインターネットが発達した時代だ。そのため、どんな情報でも簡単に手に入るように錯覚してしまいがちだ。しかし、本当はそうではなく、しっかりとした情報や知見ほど、信頼関係の中でしか得られない。そして、その信頼関係を築くための人と人と交流、政治家同士の交流、草の根的な人的ネットワークの構築が何よりも重要だということだろう。

この点は、歴史的な理解のためだけではなく、これからの日米関係、これからの日本の行く末を考えるうえでも、大切なポイントだろう。アメリカ自体が大きな岐路に立っている今だからこそ、浅い人間関係ではなく、アメリカ国内の多面的要素や政治的複雑性をしっかり理解した、より一層、深い人間関係を築いていくことの重要性が高いといえよう。

【柳川範之 略歴】

1988年慶應義塾大学経済学部通信教育課程卒業。1993年東京大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士（東京大学）。慶應義塾大学経済学部専任講師を経て、1996年東京大学大学院経済学研究科助教授、同准教授を経て、2011年より東京大学大学院経済学研究科・経済学部 教授。

経済財政諮問会議民間議員。総合研究開発機構（NIRA）理事。内閣府、国土交通省、経済産業省、文部科学省等で審議会・研究会の委員を務める。東京大学金融教育研究センター・フィンテック研究フォーラム代表。

(1) アメリカ社会の複雑性

アメリカの全体像をつかむうえで理解すべき「いくつもの顔」

https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=4061



世界史の表舞台に突如として現れたアメリカ——。

「ペリー来航」によって、日米は初めて接点を持つこととなりますが、その後、突如として日本史の中でのアメリカの存在感が薄くなりました。その間アメリカでは、いったい何が起きていたのでしょうか。

また、アメリカは、「唯一の同盟国だ」といわれていますが、私たちはアメリカのことをしっかりと理解しているのでしょうか。

アメリカをより深く理解するためには、独立戦争、南北戦争、第一次世界大戦、世界恐慌、第二次世界大戦などの重大なイベントの「繋ぎ目」を見ることが極めて重要です。

そこで、今回は、アメリカについて歴史、地理、宗教などの観点から改めて考えてみたいと思っています。そのうえで、今求められる人物像について、私なりの意見を述べさせていただきます。

戦前日本の優れた知米家たち

最初になぜ私がアメリカに興味を持ったのか、ということからお話しさせていただきます。

「唯一の同盟国」といっているわりに、私たちは本当にアメリカのことをちゃんと知っているのでしょうか。アメリカは大国なので、いろいろな種類の顔を持っています。しかし、現代の日本人は、戦前の日本人と比べて、アメリカの中のキーパーソンと人脈を築いて

第二次大戦前に死没した知米家①
原敬



100分て学ぶ教養動画メディア
100TV
チャンネルTV
confidential

多分野をスペシャリストとして極めた「稀代のジェネラリスト」・原敬は、米国を知り尽くした人物の一人である。

ジェネラリスト・原敬

ジャーナリスト	<ul style="list-style-type: none"> 郵便報知新聞社 大東日報の主筆
官僚	<ul style="list-style-type: none"> 天津領事 パリ公使館書記官 農商務省参事官 外務省通商局長 外務次官
実業家	<ul style="list-style-type: none"> 大阪毎日新聞社長 →2年で売上を3倍 大阪北浜銀行頭取 大阪新報社長 古河鋳業副社長
政治家	<ul style="list-style-type: none"> 立憲政友会幹事長 逓信大臣 内務大臣 立憲政友会総裁 総理大臣

世界周遊 (1908年~1909年)

- ・「私費」で世界周遊
- ・渡航費は現在価値で約2億円

米国で見たもの

カーネギーの巨大工場

GE(オートメーション技術)

モータリゼーションの波

高層ビル建設ラッシュ

マンハッタンの急成長

T・ルーズベルトと面会

「20世紀は欧州ではなく、米国の時代になる」と確信

いるでしょうか。そこが私の中の問題意識でした。

まず、戦前の3人の優れた知米家について紹介します。

私は松下政経塾の塾生のときに原敬について研究していました。日本が明らかにおかしくなりはじめるのは、原敬が1921年に暗殺されてからです。

原敬はどういう人かという、36歳で外務省通商局長、39歳で外務次官になり、その後、退官して、大阪毎日新聞の社長に就任しました。実業家としては、北浜銀行の頭取や、古河鋳業の実質トップも務めました。政党政治家としては実体上、伊藤博文、西園寺公望に続く3代目の立憲政友会の総裁であり、1900年頃から実質的には切り盛りしていきます。そんな彼が1908年から1909年にかけて、官費ではなく私費でアメリカと欧州を歴訪します。今の金額で2億円ものお金を自らかけて、各地をつぶさに見た中で、特に注目したのがアメリカでした。その結果、「20世紀はアメリカの時代になる」と彼は確信します。

このように幅広い力量のあった原敬について、衆議院議員の齋藤健氏が、テンミニッツTVで次のように評価しておられます。

《それだけ多方面の資質を備えた人が総理の職についていたときには、軍との関係についても、政治力をもつてうまく抑え込むことができました。

進むべき政策も的確でした。「これからはアメリカの時代だ。大事にしなければならない」と対米協調路線を主張し、「中国は支配してはならない。あくまでもビジネスで付き合いしていくべき」と中国の植民地化を避けるという具合で、今の見地から見ても極めて的確な政策をやっていました。

そこには抵抗勢力もありましたが、持ち前の政治力や面倒見のよさで対応しました。歴史を繰っても誰にどういう面倒を見たか記録が残っている。そうやって自分が動かせる領域を広げていった》

(齋藤健「ジェネラリストの巨星・原敬」テンミニッツTV)

https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=72



2人目は渋沢栄一です。渋沢栄一は絹や藍を取り扱う農民から武士になり、大蔵省の役人になって、そして日本最大の事業家になります。渋沢の生い立ちについて東洋思想家の田口佳史先生が、テンミニッツTVで次のように語っておられます。

《渋沢は、貧農ではなく、どちらかというとな豪農でした。農家ということ「時間がない＝いつも働いている＝勉強の時間がない」ということで、「本を読む時間がない＝教養がない」ところまでつながりがちなのが、江戸の農民観でした。しかし渋沢に限っては（というよりも私はかなりの数のそういう農民がいたと思うのですが）、裕福で

あったため、朝から晩まで働く必要はなかったのです。肉体労働をしなくてもよくなるとどうなるのかというと、人間の特性としてやはり学ぼうということになります。

渋沢も3、4歳の幼い頃から親について『論語』を学ぶなどを続けていました。ですから、17歳にもなると四書五経を全て学び終えた一廉の教養人になっています》

(田口佳史「渋沢栄一の生涯と教養としての『論語』(3) 身分制度への懐疑と海外での体験」テンミニッツTV)
https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=4103



抜群の教養人だった渋沢栄一は、日米関係を重要視していました。実際に60代以降、何度も訪米します。81歳になってまでアメリカに足を運んでいて、日米関係良化に向けてまさに心血を注いだ人です。

そんな渋沢栄一ですが、1924年、アメリカで排日移民法が制定さ

第二次大戦前に死没した知米家②
渋沢栄一

62歳に初渡米して以来、全身全霊を懸けて日米親善に尽力した渋沢栄一も米国を知り尽くした人物の一人。



1話10分で学ぶ教養動画メディア
10分TV
テンミニッツTV
confidential

生い立ちと米国との接点

農民	1840年 藍や綿を扱う豪農出身
武士	1864年 一橋家へ出仕 1867年 パリ万博使節団へ
官僚	1869年 民部省(後の大蔵省)入省
財界へ	1873年 第一国立銀行総監役(後に頭取) 1879年 グラント米大統領と面会 1902年 ルーズベルト米大統領と面会
渡米経験	1909年 タフト米大統領と面会 1879年 ウィルソン米大統領と面会 1921年 ハーディング米大統領と面会

米国と排日問題

1905年	アジア人排斥同盟結成
1907年	加州で反日暴動 日米紳士協約調印
1921年	加州で排日運動が激化
1924年	排日移民法

各種資料をもとに作成

↓

渋沢栄一は、排日移民法に対して「こんなことだったら、攘夷の志士をやっておいたほうがよかった」と絶望

各種資料をもとに作成

れると、「こんなことだったら、攘夷の志士をやっておいたほうが良かった」と絶望します。

この「悔し涙演説」について、渡部昇一先生がテンミニッツTVで次のようにご紹介くださいました（この講義中では、演説の主要部分も抜粋していますので、ぜひご覧ください）。

《いまの日本人がわからなくなっているのは、このアメリカによる日本からの移民禁止に対して、当時の日本人が抱いた悔しさだろう。

大正13年（1924）にアメリカで、いわゆる排日移民法として知られる新移民法ができたとき、アメリカ大使館の隣の井上子爵邸で切腹する人さえいたのである。元来は親米的だった学者や思想家、実業家の間にも、反米感情が現われた。

日本の近代資本主義の発展に貢献した財界の大御所である渋沢栄一でさえ、大正13年4月17日に帝国ホテルで開催された汎太平洋倶楽部の例会で、アメリカでの排日移民法成立に憤る演説をしている。「私は少年の頃、当時の攘夷論者の中に加わって、皇室を尊崇し、外国を排斥するの説を主張したのだが、排日移民法が通過したと聞いて、70年前にアメリカ排斥をした当時の考えを、思い続けていたほうがよかったかというような考えを起さざるをえない」と、悔し涙を流しつつ語ったといわれる演説である。

渋沢ほどの人物が、きわめて激しい言葉を使っているが、それほど悔しかったということであろう。だがそういう感情を、いまの日本人はまったくわかっていない》

（渡部昇一「本当のことがわかる昭和史《6》人種差別を打破せんと日本人は奮い立った（3）」テンミニッツTV）

https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=986



3人目は高橋是清です。高橋是清は日露戦争のときに日銀副総裁として、ユダヤ人のヤコブ・シフ率いるクーン・ローブ商会から金を集めてきました。

しかし、その高橋是清が、二・二六事件で殺されてしまいます。これがいかに痛恨事であったかについても、渡部昇一先生がテンミニッツTVで語っておられます。

《もし高橋是清が青年将校に殺されなかったら、その後、日米戦開戦前夜の状況においても石油ルート確保についても、道はあったと思う。高橋蔵相はユダヤ人とのパイプが太かったから、石油の問題さえなんとかなっていたら、日米戦争は避けられたはずである》

(渡部昇一「本当のことがわかる昭和史《4》二・二六事件と国民大衆雑誌『キング』(9)」テンミニッツTV)

https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=954



第二次大戦前に死没した知米家③
高橋是清

米国での奴隷経験があり、ユダヤ系米国人のヤコブ・シフから戦費調達した高橋是清も、米国を知り尽くした人物の一人。



1話10分で学ぶ教養動画メディア
10分TV
テンミニッツTV
confidential

奴隷経験と活かされた語学力	日露戦争での戦費調達																														
<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td style="text-align: center;">生い立ち</td><td>仙台藩の足輕高橋家の養子へ</td></tr> <tr><td style="text-align: center;">1864年</td><td>ヘボン塾(後の明治学院)で英語や基礎教養を身に付ける</td></tr> <tr><td style="text-align: center;">1866年</td><td>イギリス系銀行家のシャンドのボーイとなり英語を学ぶ</td></tr> <tr style="background-color: #eee;"><td style="text-align: center;">1867年</td><td>仙台藩の給費生として渡米騙されて奴隷として売られる</td></tr> <tr><td style="text-align: center;">1868年</td><td>帰国。英語を習得</td></tr> <tr><td style="text-align: center;">1870年</td><td>帰国後はホームレス状態芸妓の太鼓持ちとなる</td></tr> <tr><td style="text-align: center;">1873年</td><td>文部省に入省</td></tr> <tr><td style="text-align: center;">1876年</td><td>官立東京英語学校の教師</td></tr> <tr><td style="text-align: center;">1889年</td><td>ペルーの銀山で詐欺事件の被害</td></tr> </table>	生い立ち	仙台藩の足輕高橋家の養子へ	1864年	ヘボン塾(後の明治学院)で英語や基礎教養を身に付ける	1866年	イギリス系銀行家のシャンドのボーイとなり英語を学ぶ	1867年	仙台藩の給費生として渡米騙されて奴隷として売られる	1868年	帰国。英語を習得	1870年	帰国後はホームレス状態芸妓の太鼓持ちとなる	1873年	文部省に入省	1876年	官立東京英語学校の教師	1889年	ペルーの銀山で詐欺事件の被害	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td style="text-align: center;">1892年</td><td>日銀支配役西部支店長へ</td></tr> <tr><td style="text-align: center;">1898年</td><td>渡英し、金融関係者の紹介される</td></tr> <tr><td style="text-align: center;">1899年</td><td>日銀副総裁へ</td></tr> <tr><td rowspan="3" style="text-align: center; vertical-align: middle;">1904年</td><td>外債募集のため渡英</td></tr> <tr><td>シャンドが銀行幹部を説得し、パース銀行が外債を引き受ける</td></tr> <tr><td>ロンドン人脈の晩餐会でクーン・ローブ商会のヤコブ・シフと偶然出会い説得。翌朝シフは、外債引き受けを決意</td></tr> <tr><td colspan="2">シフやNY人脈の外債引き受けにより戦費調達を成功</td></tr> </table>	1892年	日銀支配役西部支店長へ	1898年	渡英し、金融関係者の紹介される	1899年	日銀副総裁へ	1904年	外債募集のため渡英	シャンドが銀行幹部を説得し、パース銀行が外債を引き受ける	ロンドン人脈の晩餐会でクーン・ローブ商会のヤコブ・シフと偶然出会い説得。翌朝シフは、外債引き受けを決意	シフやNY人脈の外債引き受けにより戦費調達を成功	
生い立ち	仙台藩の足輕高橋家の養子へ																														
1864年	ヘボン塾(後の明治学院)で英語や基礎教養を身に付ける																														
1866年	イギリス系銀行家のシャンドのボーイとなり英語を学ぶ																														
1867年	仙台藩の給費生として渡米騙されて奴隷として売られる																														
1868年	帰国。英語を習得																														
1870年	帰国後はホームレス状態芸妓の太鼓持ちとなる																														
1873年	文部省に入省																														
1876年	官立東京英語学校の教師																														
1889年	ペルーの銀山で詐欺事件の被害																														
1892年	日銀支配役西部支店長へ																														
1898年	渡英し、金融関係者の紹介される																														
1899年	日銀副総裁へ																														
1904年	外債募集のため渡英																														
	シャンドが銀行幹部を説得し、パース銀行が外債を引き受ける																														
	ロンドン人脈の晩餐会でクーン・ローブ商会のヤコブ・シフと偶然出会い説得。翌朝シフは、外債引き受けを決意																														
シフやNY人脈の外債引き受けにより戦費調達を成功																															

各種資料をもとに作成
各種資料をもとに作成

原敬が暗殺されたときのアメリカの大統領は誰だったのか

原敬が暗殺されたのは1921年です。渋沢は、1924年の排日移民法を觀て絶望して、1931年に亡くなります。アメリカ金融界のユダヤ人ともものすごいネットワークがあった高橋是清は、二・二六事件(1936年)で暗殺されてしまいます。

また、1921年11月4日に原敬が亡くなってから、半年以内に、原敬を含む3人が亡くなります。1人は明治維新のもう1人の重要人物であり、早稲田大学をつくった大隈重信です。もう1人は、元老・山縣有朋です。この1921年あたりから1922年にかけてこれらの人が亡くなり、その後、日英同盟が破棄され、排日移民法ができ、大恐慌を経て、日本がおかしくなっていきます。

そのいちばん初めの起点に誰がいたのか。原敬が暗殺されたとき

10分10秒で学ぶ教養動画メディア
10分TV
チャンネルTV
confidential

【イントロ】なぜ、いま米国研究が
三人の知米家と同時期のハーディング

原敬暗殺後、米国は日英同盟を破棄させて日本を孤立化させた。
当時の米大統領はハーディングという規格外の人物だった。

1913年	ウィルソン大統領就任
1914年	第一次世界大戦勃発
1921年	ハーディング大統領就任
	原敬暗殺
	ワシントン軍縮会議
	日英同盟破棄
1923年	ハーディング死去 クーリッジ大統領就任
1924年	排日移民法
1929年	フーヴァー大統領就任 世界恐慌
1931年	渋沢栄一死去
1933年	Fルーズベルト大統領就任
1936年	高橋是清暗殺



第29代米大統領
ウォレン・ハーディング

酷似



第45代米大統領
ドナルド・トランプ

【イントロ】なぜ、いま米国研究が
トランプとハーディングは酷似

1話10分で学ぶ教養動画メディア
10TV
 アニメックTV
confidential

ハーディングは、トランプとの共通点が極めて多く、政権メンバーを「オハイオギャング」といわれる身内で固めていた。

両者比較	ハーディング	トランプ
実業家経験	新聞社	不動産事業
選挙前予想	泡沫候補	
選挙手法	最新メディアでポピュリズムを煽る	
	ラジオ	SNS
外交	グローバル主義否定、自国第一主義	
	国際連盟未加入	NATO/TPPなど 否定
	保護貿易政策	
内政	大規模減税	
縁故主義	オハイオギャング	クシュナー イヴァンカ
スキャンダル	汚職事件 女性問題など	ロシア疑惑 女性問題など

(出所) 各種資料をもとに本紙で作成

オハイオギャング



オハイオギャングの顔ぶれ

引用元：東秀雄氏のデンミニッツTV講義
 「1920年度米国大統領選挙」

大統領を2名輩出

クーリッジ第30代大統領
 フーヴァー第31代大統領

「オハイオ・ギャング政権」は、
12年間続く

のアメリカ大統領は誰だったのか。調べていくと、ウォレン・ハーディングという人物が出てきました。これが、トランプ前大統領と非常に近い、氏育ちでした。

何が似ていたかという点、両者とも当時全くの異種だと見られています。ハーディングは、オハイオの300ドルで買った新聞社を大きくしました。トランプは、ニューヨークの不動産屋です。選挙前予想では泡沫候補でした。選挙手法は、ハーディングの場合は当時の新メディアであるラジオで、トランプの時代はSNSです。両者ともグローバリズムを否定して、徹底的なアメリカファーストの保護主義政策を取ります。内政については、とにかくひたすら減税します。世界中の金をむしろアメリカに戻してきます。

もう一つ、ハーディングは、当時の副大統領で次の大統領でもあるカルビン・クーリッジや、大恐慌が起こったときの大統領であるハーバート・フーヴァーなどで周りを固めます。「オハイオ・ギャング」と呼ばれる縁故者もいました。この「オハイオ・ギャング」

の人脈による政治が、12年間にわたって続いていきます。あとで詳しく話しますが、スキャンダルが出るまで身内主義になります。

テンミニッツTVで、東秀敏氏が次のように講義されています。

《当時はWASP、つまり白人、アングロサクソン、プロテスタントの層の支配が盤石で、加えてアイビーリーグ出身という肩書き、そして財閥の支持等を持つ人々が、談合で政治を動かしていた時代でした。しかし、ハーディングは田舎の出身で、一応WASPには該当しますが、学歴や財閥の後ろ盾もない、完全なアウトサイダーでした。彼は、「オハイオ・ギャング」と呼ばれる地元からの縁故主義による人脈を連れてきて、地元色を強く打ち出して国政にデビューしました。しかも、トランプ大統領とはこの点で異なるのですが、敵をまったくつくらない穏健な人として振る舞って、共和党内でも独特の存在感を発揮しました》

(東秀敏「ハーディングとトランプ～100年前の米大統領選を読む (2) ハーディングの実像」テンミニッツTV)

https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=3547



《実際にスキャンダルばかりが注目されがちですが、当時のハーディング、クーリッジ、フーヴァーによる10年間の共和党支配は、かなり協調性が取れていました。ウィルソン政権末期のさまざまな経済問題を、ハーディングの最初の3年間で一気に解決しているのです。失業率も半分に減らしました。これはものすごいスピードです。これは、縁故主義で集まったオハイオ・ギャングが取り組んだために生まれた結果だと思うのです》

(東秀敏「ハーディングとトランプ～100年前の米大統領選を読む (5) 新たなスタイルの政治家」テンミニッツ

TV)



https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=3550

さて、ハーディングの出身地・オハイオは、アメリカ中西部の北東に位置し、アパラチア山脈の西側にあたります。

ロッキー山脈とアパラチア山脈の真ん中にあるミシシッピ川流域はハートランドといわれています。ある意味では、ここがアメリカの中心部です。そして、1800年代を通して、ニューオリンズが最大の貿易拠点です。私たちが知っているアメリカは、東でいくと、ボストン、ニューヨーク、ワシントンのラインです。西はシアトル、サンフランシスコ、ベイエリア、シリコンバレー、ロサンゼルスです。どちらもロッキー山脈の外側とアパラチア山脈の外側ですが、ここだけしか知らないと、アメリカの全体像が見えてきません。

その次の図<領土拡大の変遷>も見てください。プリマスとジェームズタウンは、イギリスの中の負け組が入植した地です。一つは冒険的な貴族で、こちらはジェームズタウンに来ました。もう一つ



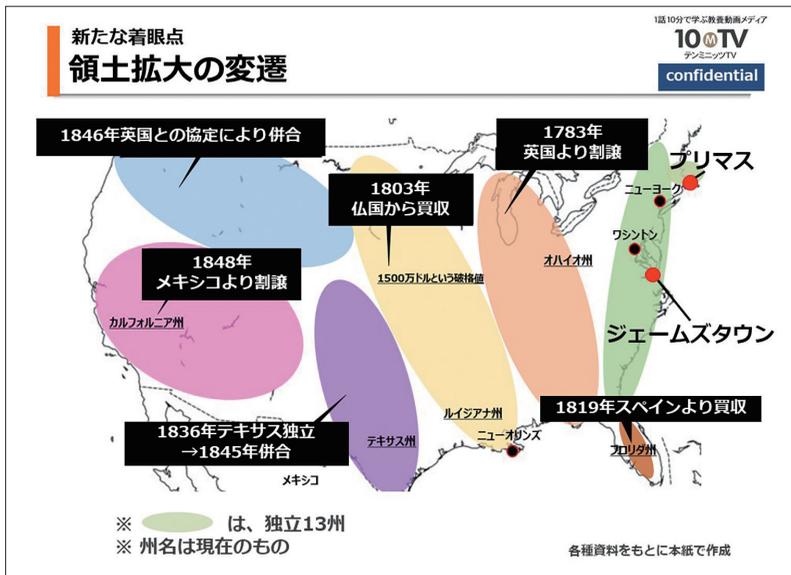
は宗教原理主義者で、こちらはプリマスに来ました。

この図で覚えておいていかないといけないことは、アメリカの独立戦争です。1776年に独立して、わずか50年ほどの間に、北米の東のカリフォルニアからオレゴンまで、すべて取っていきました。ネイティブ・アメリカンも、フランスもいました。それから、テキサスやカリフォルニアはメキシコから奪ってくるということになります。どうしてこういうことができたのでしょうか。

これはアメリカが持っているもう一つの「アニマルスピリット」というか、荒っぽさを象徴している図だと思います。

アメリカは日本にとって唯一の同盟国ですが、われわれは本当にアメリカのことを知っているのでしょうか。アメリカは、数十年単位で全く別の国に変わっていきますし、その変化のスピードがものすごく速いのです。繰り返し分断したり、統一したり、イノベーションを起こしたりします。

アメリカは大国なので、顔は一つではありません。「アメリカが」





問題意識

10分間で学ぶ教育動画メディア
10TV
アニメックTV
confidential

- これからの日本と世界の動向を読むためにも、正しい米国理解は不可欠。
- また、米国は日本にとって唯一無二の同盟国だが、日本人は2016年のトランプ政権誕生から、現在にいたるまで、米国政治に翻弄されている。
- 米国史は「分断」と「統一」の繰り返しであり、100年前にもトランプに酷似したウォレン・ハーディングという人物が大統領選で勝利している。
- そこで、我々にとって馴染みの薄い「米国のもう一つの顔」を明らかにしつつ、米国の再定義を試みた。
- その上で、いま求められる人物像はどのようなものであるかを考えてみた。

という言い方はなく、「もう一つのアメリカ」というように、いくつかの顔を持っているものとして見ていかないと全体像が見えません。2016年の米大統領選挙でトランプが当選したときに「ありえない」といっている人がいましたが、ある種トランプが持っている側面は、アメリカの原型に近い遺伝子かもしれません。

(2) アメリカの起源と南北戦争

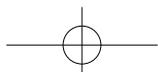
南北戦争は奴隷解放のためではなく利害の対立

https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=4062



アメリカ建国の起源

その次は、アメリカのもともとの歴史です。先述のように、アメ



リカをつくった人たちは、英国の「負け組」です。当時のグローバル主義の大英帝国に対して、アンチを唱えました。

それには二種類の人々がいます。一つは二流三流の貴族で、冒険家たちです。もう一つは宗教（キリスト教）原理主義で、清教徒の宗教亡命者です。基本的には、この二つです。

このことについて、テンミニッツTVで東秀敏氏が次のように分析しておられます。

《最初のアメリカは、二流、三流貴族出身の冒険家と宗教亡命者であるピューリタンを主とする英国系の移民から成立していました。ここでいう英国系移民は、雑駁にいうと負け組といえるかもしれません。この勢力が国づくりに取り組み、その後ろにはハイリスク・ハイリターンを求める欧州ユダヤ系の投機家がありました。こうした背景が、シリコンバレーの起業精神につながっています》

（東秀敏「アメリカとは何か」～米国論再考Vol.2 (1)」

米国の原点

「二流三流貴族」と「清教徒」の野望

15分10分で学ぶ教養動画メディア

10 TV

テンミニッツTV

confidential

「負け組」の英国系移民が建国した米国には、もともと二種類の人たちが存在する。

二流三流貴族（冒険家）	清教徒（宗教亡命者）
<p>ベンチャースピリット旺盛</p> <p>背後にユダヤ系投資家の存在</p> <p>拠点はバージニア州ジェームスタウン</p>	<p>キリスト教原理主義者</p> <p>冒険家的な金融資本主義に否定的</p> <p>拠点はマサチューセッツ州プリマス</p>
 <p><small>Wikimedia Commons</small></p>	 <p><small>Wikimedia Commons</small></p>
初代大統領・ジョージ・ワシントン	第2代大統領・ジョン・アダムス

合理解科をもとに作成

- グローバル主義の大英帝国に対して、革命政権樹立を企てた英国の「負け組」たち
- 建国時は、黒人やインディアンの権利は含まれず

テンミニッツTV)

https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=3711



二流三流の貴族はジェームズタウンに拠点を置きます。初代大統領のジョージ・ワシントンは、この末裔です。キリスト教原理主義者のほうは、マサチューセッツのプリマスに拠点を置きます。第2代大統領のジョン・アダムスは、ここの末裔です。

もう一つの複雑な構造は、南部は最初からフランス型で農業を推進します。トマス・ジェファソンのように駐仏大使の経験があって、フランス型の政体を支援する人たちがいました。一方で、アレクサンダー・ハミルトンのようにイギリス型の連邦政府を強化して、工業化を推進していく人たちがいました。南北戦争でいうと、北部の支持者に当たります。この二つの対立があります。

1800年に当選したジェファソンが第3代大統領になると、少なくともペリーが日本に来るまでの国家像は、ややフランス型に変わっ

1話10分で学ぶ教養動画メディア

10分TV
テンミニッツTV
confidential

米国の源流 「仏国型」と「大英帝国型」の分断

**建国前から、仏国型と大英帝国型の2種類の潮流が存在した。
この対立は、南北戦争の遠因となる。**

仏国型		X 対立	大英帝国型	
統治	各州の独立性を重視		統治	連邦政府の強大化重視
産業	農業推進	産業	工業推進	
リーダー	トマス・ジェファソン ➤ 第3代大統領 ➤ 独立宣言の起草者 ➤ 親仏家 ➤ 駐仏大使経験あり	リーダー	アレクサンダー・ハミルトン ➤ 初代財務長官 ➤ 合衆国憲法の起草者 ➤ 親英家	
その他	南北戦争における南部支持者の源流	その他	南北戦争における北部支持者の源流	

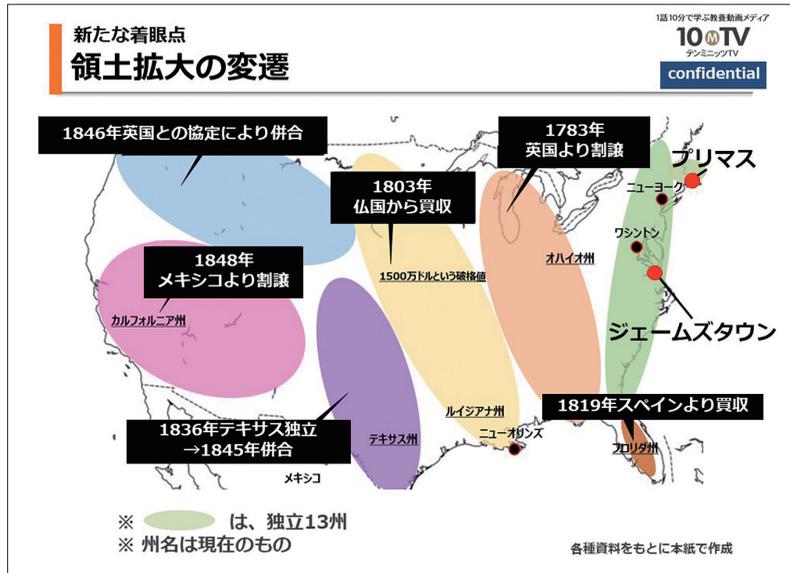
1800年にジェファソンが大統領になると、国家像は仏国型へ方向転換

ていきます。

急速な領土拡大とその背景

<領土拡大の変遷>をもう一回見てもらいたいのですが、どうやって領土を取っていったのか、ということです。図のグリーンのところから、次にオハイオ州を取り、ルイジアナ州のニューオリンズを取ります。それからテキサスを独立させて、メキシコから併合させ、カリフォルニア州を取ります。

この時代の大統領は4人だけ覚えておけばいいと思います。まずは、第3代大統領のトマス・ジェファソンです。彼は、黒人奴隷農場主で、ルイジアナ買収を画策しました。次に、第7代大統領のアンドリュー・ジャクソンです。こちらも黒人奴隷農場主です。それから、第5代大統領のジェームズ・モンローです。これも徹底的に



ですが、ほとんどが作り話です。米英共通の友情話は、実体とはかなりそぐわないのです。しかし、チャーチルのすごみは話をつくってしてしまうことです。「英米は昔から仲が良かった」という話に変えていきます。これはすごく大事な要諦だと思います。

南北戦争によってアメリカは次の時代に入っていく

その次は、南北戦争とは何だったのか、ということです。これは別に奴隷解放のために南北戦争をやったわけではなくて、完全な利害の対立です。南部は、黒人奴隷を酷使して、プランテーション農業で綿花をつくり、イギリスにがんと輸出するといった自由貿易を進めていきます。北部のほうは、特に米英戦争以降、イギリスの工業製品が途絶えたので、工業化を進め、国内産業保護のために保護貿易を要求します。対立の基本形は、保護貿易対自由貿易で

南北戦争

分断どころか崩壊寸前の状態に

度重なる領土拡大によって、北部と南部の対立が激化。
南北戦争へと発展。

15分10分で学ぶ教養動画メディア
10 TV
テンミニッツTV
confidential

利害の不一致

南部	×	北部
海外輸出推進のため、 自由貿易要求 黒人奴隷酷使による プランテーション農業 が経済の中心	対立	国内産業保護のため、 保護貿易要求 米英戦争(1812)による、 英国工業製品の途絶で 工業化 が進展

南北戦争へと発展

- ・ 米国史上最も死者を出す大惨事へと発展（南北戦争の死者数は、第一次世界大戦・第二次世界大戦時よりもはるかに多い）。
- ・ 米国は崩壊寸前の状態になる。
- ・ 他方、この戦争は米国の驚異的發展の重要な契機となる。

南北戦争

南北戦争前の米国の姿

1話10分で学ぶ教養動画メディア

10 TV
デジタルTV

confidential

南北戦争前までの米国南部の世界は『風と共に去りぬ』に描かれているように、現在の米国とは全く違う世界だった。

『Gone With the Wind (風と共に去りぬ)』

- 作者：マーガレット・ミッチェル
- 刊行：1936年
- 南北戦争下の南部（ジョージア州アトランタ）における、女性・スカーレットの半生を描いた作品
- 現在は、「白人農園主を美化し、人種差別を助長する」として根強い批判と抗議を受け続けている



『風と共に去りぬ』ポスター(1939)

す。

1860年にリンカーンが大統領選に勝利するのですが、南部のほうは、ジェファソン・デイビスという別の大統領を担いで、1861年から65年にかけて南北戦争に発展していきます。

アメリカの死者の数を見るとわかりやすいのですが、南北戦争の死者は約62万人です。第二次世界大戦は約29万人です。要するに南北戦争での戦死者数のほうが多いのです。特にアトランタにいたっては、徹底的に破壊されています。

『風とともに去りぬ』という映画がありますが、南北戦争前のアメリカを描いています。南部の白人たち、特に奴隷農業主たちが、いかに貴族的な社会をつかっていったかが非常によくわかる映画です。アトランタが燃やされるシーンを覚えておいてください。結果的に南北戦争によって、アメリカはその次の時代に入っていきます。

(3)産業革命と帝国主義の始まり

中国を新たな標的としたアメリカ帝国主義時代の始まり

https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=4063



南北戦争後の驚異的な経済発展

1800年代は、南北戦争で一回大混乱しますが、南北戦争以前のアメリカと、それ以降のアメリカは全く別の国です。1897年にマッキンリーが出るまでの間に、アメリカは別の国になります。全く違う南部と北部が一つの国になっていきます。

国力で見ると、工業生産では1894年にすでに世界一になっています。また、人口で見ると、1860年にペリーが日本にやってきた頃のアメリカの人口は3100万人です。江戸時代の日本の人口は3000万人

南北戦争後

南部でも工業化が加速し、急成長

1894年まで学ぶ教育動画メディア
10TV
テンミニッツTV
confidential

北部の勝利により、南部は黒人利権を失い、経済基盤が瓦解した一方で、全米で工業化が一気に加速。米国の資本主義は急発展を遂げた。

米国の急発展		巨大企業の出現	
国力	1894年に工業生産が世界一	米モルガン財閥 (1864設立)	
人口増加	約3100万人(1860年) ↓↓↓ 約7600万人(1900年)	スタンダードオイル社 (1870設立)	
都市の発展	高層ビル建設ラッシュ	カーネギー鉄鋼会社 (1892設立)	
西部開発	金や鉱産資源の採掘	フォード社 (1903設立)	
大陸鉄道敷設	南北統一の象徴へ		

各種資料をもとに作成

くらいなので、あまり変わりません。ところが、アメリカは工業化で一位になることによって、1900年には7600万人まで人口が増えます。ヨーロッパ、東欧、中国など、いろいろなところから移民が集まって、人口が一気に2.5倍弱ほどになっていきます。その結果として、今のマンハッタンの原型ができました。

財閥に関しては、モルガン財閥、スタンダード・オイル、カーネギー、そしてフォードができます。このときにアメリカの最初の財閥の原型ができたのです。ある種、GAFGAが誕生してくる時に結構似ているかもしれません。

ちなみに日本は、徳川家康が関ヶ原で勝ったことにより、東日本と西日本が徳川幕府のもとで一つになっていきます。一方、アメリカは、南北戦争後の40年間で、強烈なスピードで国家の統合を進めていきました。ここでアメリカは別の国になっていて、これが2回目大きい変容です。

次の図<二流国家から超大国へ>の写真は、南北戦争前のプランテーションの様子と、この時代のことを書いた黒人奴隷のアンクル・トムの物語です。南北戦争後のセントラル・パシフィック鉄道によって大陸横断鉄道が三つでき、スタンダード・オイルができ、マンハッタンの写真にあるようなビルが出来上がってきます。そして、フォードの工場はあっという間に1000万台ほどつくってしまいます。マンハッタン橋にはアメリカの経済発展の原型が見えます。

そのようなアメリカを、原敬が1908年に私費で訪れたことは先述のとおりです。

原敬はなぜ私費で周遊したかったのでしょうか。なぜ自身で2億円のお金を使って、見に行ったのでしょうか。彼は、フォードの工場やマンハッタンの建設風景、そしてGEのラインを見たかったのです。その国の政治家に会いたかったわけではありません。大使館経由でいくと、お仕着せの政治家連中との面会の日程をどんどん

飛躍的發展

二流国家から超大国へ

1日10分で学ぶ教養動画メディア

10のTV

チャンネルTV

confidential

南北戦争後、米国は全く別の国に生まれ変わり、二流国家から超大国になるための礎を築いたといえる。

南北戦争前

ジョージア州のプランテーション農業の様子



『アンクル・トムの小屋』
(1852)
主役の黒人奴隷トム

南北戦争後



鉄道敷設
セントラル・パシフィック

1900年頃のマンハッタン



マンハッタン橋
1909年頃

組まれますが、彼にとってはそんなことはどうでもよかったのです。

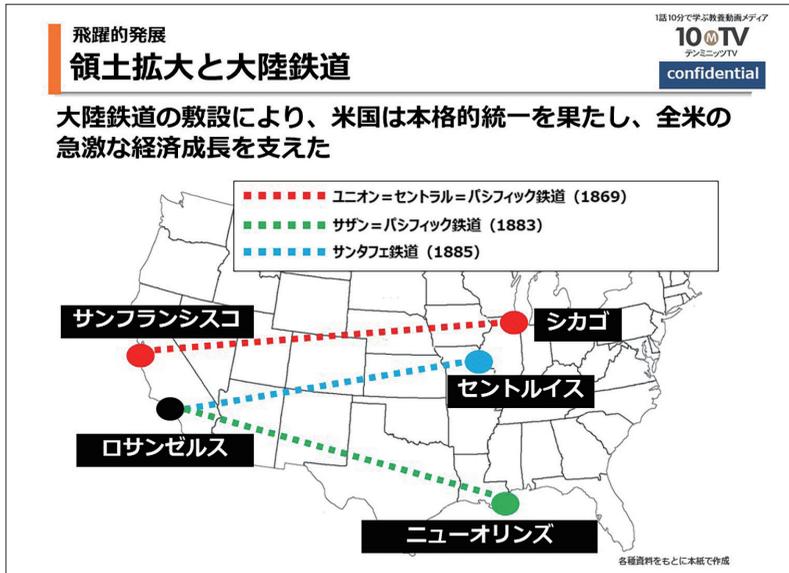
その当時のアメリカを動かしている原理、アメリカの強さとはいったい何なのかを見るために、自分で周遊の工程を組みたかったので、私費で行きます。これが原敬の慧眼です。原敬はフランスで代理公使をやっていたので、フランス語は自由にしゃべれました。英語は、読むことしかできなかったですが、英字新聞は読めました。

ちなみに、岩倉使節団がアメリカを見に行った1871年は、まだアメリカが南北戦争の混乱の中で、政体もしっかりしておらず、アメリカの中で見るべきものがあまりありませんでした。原敬が注目して、自分で見て調べたかったアメリカは、これから世界の最有力候補になるアメリカでした。

鉄道網の発展と西部開拓

この時代のインフラの要になったのは、1869年のユニオン・セントラルのパシフィック鉄道です。これは、サンフランシスコからシカゴをつなぎます。それから、サザン＝パシフィック鉄道が1883年にニューオーリンズからロサンゼルスをつなぎます。さらに、1885年にサンタフェ鉄道がセントルイスからロサンゼルスをつなぎます。このインフラができることによって、本格的にアメリカが一つの国になっていきます。

最初にアパラチアとロッキー山脈の絵を出しました。次に、どうやってアメリカが北米大陸を全部乗っ取ったのかという絵を出しました。それに続いて、この図<領土拡大と大陸鉄道>は3枚目になるのですが、アメリカがどうやって統一したのかを示す、そのときのインフラの絵です。この3枚の絵を覚えておいていただきたいと



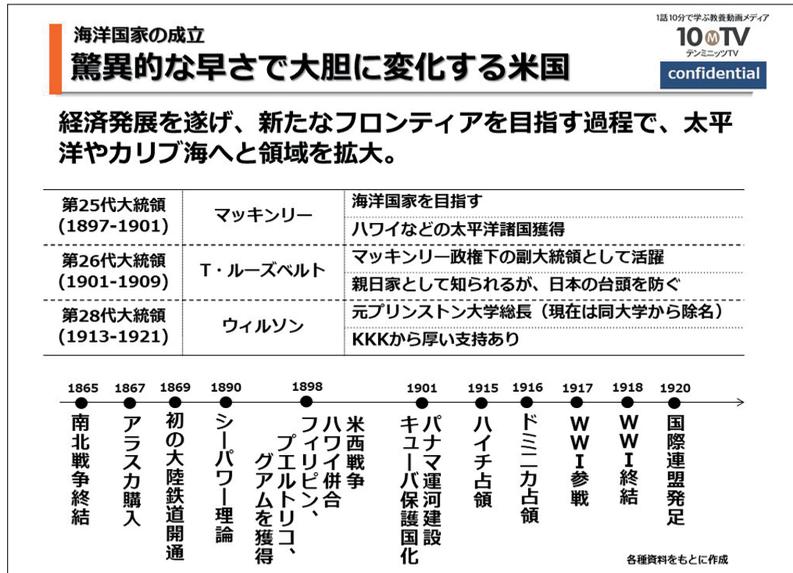
思います。

アメリカ帝国主義時代の始まり

これでアメリカは国内で世界最大の工業国になりますが、その次のフロンティアをカリフォルニアではなく中国に求めます。中国に求めるときに、主要な役割を果たした有名な大統領が、第25代大統領のウィリアム・マッキンリー、第26代大統領のセオドア・ルーズベルト、第28代大統領のウッドロウ・ウィルソンです。

まずマッキンリーはハワイの王朝をつぶして併合してしまいます。それから、スペインに戦争を仕掛けて、フィリピンとプエルトリコを取ってしまいます。さらに、パナマ運河も取り、この頃キューバも保護国にしてしまいます。その後、ウィルソンのときには、ハイチ、ドミニカとどんどん取っていきます。

セオドア・ルーズベルトは日本では親日的な大統領ということに

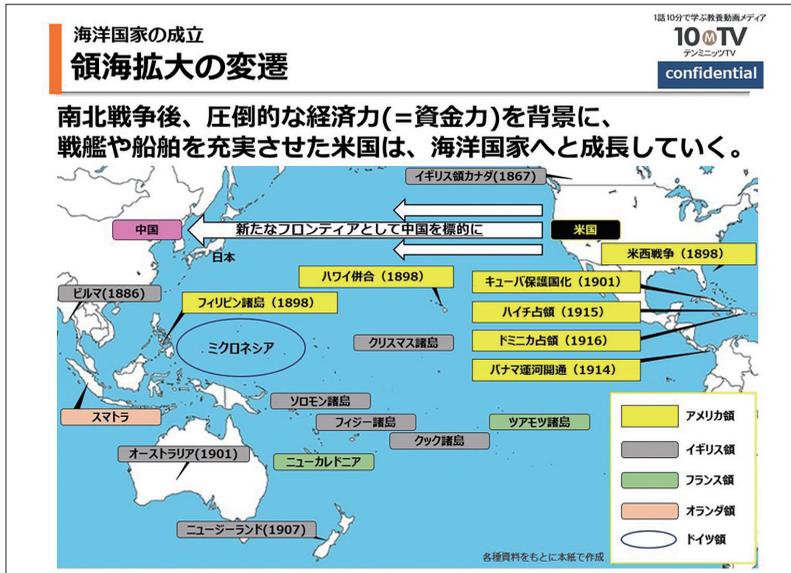


なっていますが、日本の台頭を防いだ大統領ともいえます。

ウィルソンは国際連盟をつくったプリンストン大学総長です。インテリで立派な人だというイメージもありますが、彼はメンバーではなかったものの、「KKK（クー・クラックス・クラン）」という白人至上主義者の圧倒的な支持がありました。ちなみに彼の名前を取った「ウィルソンスクール」がプリンストン大学の中にありましたが、そのスクールの名前は、ウィルソンの人種差別を理由に、もうなくなってしまっています。

総じて、歴代大統領に親日的大統領はほとんどいなかったともいえます。この部分は気をつけてみておかないと見間違ってしまう。

次の狙いを中国に定めて進出していったときに影響を与えたのがアルフレッド・セイヤー・マハンのシーパワー理論ですが、そのシーパワー理論はセオドア・ルーズベルトが書いたともいわれています。ここで一つ大きな流れが変わってきます。



絵で見ると、アメリカが帝国主義だった時代が本当によくわかります。ハワイ、フィリピンを取り、キューバ、ハイチ、ドミニカ、パナマと、どんどん拡張していきます。この流れの中で、ペリーが日本に來たり、南北戦争があったりしました。

アメリカは、工業化で圧倒的に成功して国内にフロンティアがなくなった瞬間、中国に目を向けます。ここからアメリカの帝国主義の時代が始まるという流れです。ここでもまた違うアメリカの顔が出てくるのです。

(4) アメリカの「もう一つの顔」

アメリカの「もう一つの顔」はハートランドにある

https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=4064



「自国第一主義」と「常態への復帰」

ウィルソンはアメリカ本来のDNAに合っていませんでした。第一次世界大戦の途中から参戦して、グローバリズムで国際連盟をつくり、大英帝国がやったことと同じようなことをやろうとしました。しかしアメリカは、基本的にはイギリスが嫌でイギリスから逃げてきた人たちがつくった国なので、そもそも遺伝子が合いません。ウィルソン政権の最後のほうになると、人種暴動が起きたり、ウォールストリートで爆破事件が起きたりしました。

この頃、第一次世界大戦の終わりの1918年から3年にわたって、感染症であるスペイン風邪のパンデミックが起こります。ウィルソンは大統領再選に立候補しようと思ったのですが、出られないくらい人気がありませんでした。

【米国の再定義】第一次世界大戦前後

ウイルソン流の限界

1話10分で学ぶ教養動画メディア

10TV
アニメックTV

confidential

領土・領海を拡大した後、大戦景気を経験したが、その後、国内はボロボロの状態に。ウイルソン政権に非難が集中。

ウイルソン政権=大英帝國的でグローバリズム外交 (米国内では異質)

パリ講和会議主導

国際連盟創設

米国は分断どころか崩壊寸前に

深刻な不況、失業問題、厭戦気分、人種暴動、ストライキ、テロ、スペイン風邪パンデミック

「異質」なウイルソン政権に批判が集中

人々は「常識」を渴望

「常識」とは・・・米国第一主義、孤立主義、国内矛盾解決を最優先

人びとが「もうグローバルなんかもうどうでもいい」「アメリカ第一主義で、孤立主義の国内問題を解決してくれ」となっていたそのときにハーディングが出てきます。

ハーディングの選挙スローガンは、「正常に戻ろう」ということと「アメリカ第一主義」です。それから、ヨーロッパに関わりたくないという、本来のアメリカの「孤立主義」です。

民主党の大統領候補のコックスも共和党のハーディングも両者とも無名の候補者で、ハーディングは誰を敵にしたかという、ウイルソンを徹底的に批判します。それから、選挙のやり方を変えて、徹底的にラジオを使います。トランプがSNSを使ったのと同じようなことです。この100年前のアンドリュー・ジャクソンもそうでしたが、ポピュリズム的な手法を徹底的に活用します。その結果、相手候補者との得票差の比率で見ると、ハーディング以上に勝った大統領はいません。

その後やったことは、極端な減税と富裕層の優遇、そしてもう移

【米国の再定義】米国の覚醒

「トランプの祖・ハーディング」の台頭

10分間で学ぶ教養動画メディア

10のTV

テンミニッツTV

confidential

ウィルソンは2期連続で大統領を務めたが、1920年の大統領選でハーディングが圧勝し、米国を「正常」へと戻した。

1920年大統領選	ハーディングの選挙戦略
<ul style="list-style-type: none">・コックス(民主党) VS ハーディング(共和党)・民主党：ウィルソンは党内で支持を得られず・共和党：T・ルーズベルトは都合により辞退	<ul style="list-style-type: none">・「米国第一主義」「孤立主義」・「『正常』へ回帰」を猛アピール・ウィルソン前大統領を徹底批判・最新メディアのラジオを駆使・徹底的にポピュリズムを煽る

ハーディングは史上最大の得票差で勝利し、以下の方向性を示す

内政	極端な減税、失業率半減、富裕層優遇、移民割当法（後の排日移民法）
外交	超高率関税、国際連盟加入拒否 ワシントン軍縮会議、日英同盟破棄

民はなるべく入れないということです。これが排日移民法として現れてきます。また、とにかく高率関税をかけます。そして、ウィルソン前大統領が提案してできた国際連盟への加入も拒否します。一方で、ワシントン軍縮会議ではアメリカが中国に出て行くために、日英同盟を破棄させます。こうしたことがセットになって、ここでまた次のアメリカの顔が出てきます。

狂騒の20年代から世界恐慌へ

1920年代は「狂騒の20年代」と呼ばれています。この時代に世界中の金をアメリカに持ってきてしまうので、株価が猛烈に上がってきます。

ハリウッドも勃興しました。ワーナーブラザーズ、MGM、コロムビアもこの時代の産物です。ジャズが鳴り響き、チャールズ・チャップリンがいて、フォードは24年には累積で1000万台を超えま

「今」と重なる100年前
狂騒の20年代とその反動

1話10分で学ぶ教養動画メディア
100TV
アンニョンTV
confidential

ハーディング政権確立以降、米国は経済・文化・芸術などが驚異的發展を遂げたが、その反動で世界恐慌を経験。

狂騒の20年代



オハイオギャング政権と時期が重なる

- ・ハーディング →1921-1923
- ・クーリッジ →1923-1929
- ・フーヴァー →1929-1933

世界恐慌と混乱



- ・フーヴァー政権時に世界恐慌を経験
- ・その後、FDRのニューディール政策 (準社会主義政策)へ

す。それから、当時のニューメディアだったラジオは全盛期を迎えます。

このあたりのことは、映画『華麗なるギャツビー』を観てもらくと、どんな世界がこの10年間あったのかがよくわかります。

政権では、ハーディング、クーリッジ、フーヴァーらが政治を担います。しかし結果的には、大恐慌が起きてしまいます。

『怒りの葡萄』には、アメリカの失業率が25パーセントを超えるということで、いかにそれが高くなったかに関連する話がたくさん出てきますが、ここでフランクリン・ルーズベルトが出てきます。彼が取った政策は、準社会主義政策で、またもう一回別のアメリカに入っていきます。

ハートランドに見るアメリカの「もう一つの顔」

アメリカの「もう一つの顔」として、押さえておかないといけないのは、ハートランドです。ここが本来アメリカのある種の中心部なのです。アングロサクソンホワイトではなく、あとから来たアイルランド系、スコットランド系、ドイツ系がミズーリ州のいちばん豊かなところで、宗教的にはキリスト教の福音派がここに基盤を築いています。アメリカ人の中で、最も熱心に教会に通っているのが、この中西部のハートランドの人たちです。

私たち日本人が普段接しているのは、コロンビア大学やハーバード大学、スタンフォード大学などで学んだ人々やシリコンバレーの人々、そしてウォール街やワシントンの人々が多いですが、ここと全く違う人たちがいます。一生のうちに一回も海外に行ったことが

15分10分で学ぶ教養動画メディア
10 TV
チャンネルTV
confidential

繰り返す反動
日本とは接点がない米国の「もう一つの顔」

米国史から見ると、トランプは米国史上「異質」ではなく、むしろ「正常」。その支持層が米国の「もう一つの顔」。

<ul style="list-style-type: none">・ 熱狂的かつ閉鎖的な保守層・ 大企業や大学、マスコミの中にはほとんど存在しない人たち・ ハートランドやテキサスなどの南部の人たち	}	<ul style="list-style-type: none">・ 主にハーディングやオハイオギャング、トランプを支持・ 普段の日本人が接する機会が少ない・ 「米国のもう一つの顔」
<p>ハートランド（米国中西部）について</p> <ul style="list-style-type: none">・ 建国以来差別されたアイルランド系、スコットランド系、ドイツ系白人が、自由の地を求めて移住・ キリスト教福音派原理主義に根ざした保守基盤を築いた地域といえる		

ないような人たちがいっぱいいます。こういう部分が「もう一つの顔」です。

この人たちのことについて、伊藤元重先生がテンミニッツTVで次のように紹介しておられます。

《先日アメリカに行った時、たまたま人に勧められて読んだ本で『Hillbilly Elegy』（邦題『ヒルビリー・エレジー——アメリカの繁栄から取り残された白人たち』J.D.ヴァンス著、光文社）があります。ヒルビリーというのは、アパラチア山系の麓あたりに広がっている、いわゆるプアホワイト、歴史的にいうとかつてアイルランドやスコットランドから来た非常に貧しい人たちのことをいいます。この人たちがいかに貧しいかということが克明に書かれているのですが、すごい内容です。

実はこの人たちは一時的に豊かになったのですが、それは戦後、特に鉄鋼や自動車産業が盛んになってきて雇用されたからです。それが駄目になって元に戻ってしまいました。麻薬が蔓延し、教育なども受けられなくて生活保護を受けるといった非常に厳しい状況となり、結果的にこの人たちがトランプ氏に投票して政権が動いたといわれています》

（伊藤元重先生「格差の固定化と教育問題」テンミニッツTV）

https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=1749



さらに気をつけないといけないのは、テキサスとフロリダが州の法人税をゼロにしたので、イーロン・マスクのスペースXやシリコンバレーベンチャーが、税金やアパートが高くなったシリコンバレーからテキサスに向かって、どんどんと拠点を移しはじめていることです。これも押さえておいたほうが良いと思います。

米中のはざまの中で生きていくには相当な知恵が必要

サマリーとしてまとめます。アメリカは最初から分断がありました。二流三流のベンチャーの貴族と清教徒の対立、そしてフランス型と大英帝国型の対立です。

南北戦争までに大陸国家として成長しましたが、国内の矛盾のピークに達したのが南北戦争です。ここでアメリカは、いったんは崩壊寸前になりますが、この困難を核として工業化を成し遂げ、インフラとして大陸鉄道をつくります。二流国家だったアメリカが大国になり、人口も急増してきます。1900年から、今度はフロンティアに海洋国家として中国を目指します。それから、いったんウィルソンでグローバル外交にしようとしませんが、その後、ハーディング以来、大恐慌のフーヴァーに突入するまで「狂騒の20年代」になります。

Summary

10分まで学ぶ読書動画メディア
10 TV
チャンネルTV
confidential

- 建国時から「二流三流貴族 or 清教徒」や「仏国型 or 大英帝国型」など、さまざまな対立や分断がある
- 重要拠点ニューオーリンズを獲得するなど、南北戦争までに大陸国家へと急成長
- 国内矛盾が南北戦争へと発展。米国は崩壊寸前となる
- その後、農業国だった南部でも工業化が推進。経済は急発展を遂げ、二流国家だった米国は大国に生まれ変わり、海洋国家へと変貌を果たす
- 第一次世界大戦後、「異質」だったウィルソンのグローバリズム外交に非難が集中し、自国第一主義を掲げたハーディングが大統領に就任する
- 「狂騒の20年代」の中でさらに発展を遂げ、超大国の仲間入りを果たすが、その反動で世界恐慌を経験
- 米国は政治や経済において、極端から極端にブレて、短期間のうちに急激に姿を変える傾向がある
- 米国の急変化に惑わされないために、「米国のもう一つの顔」への理解は必須
- その点において、これからリーダーは、歴史的洞察力を持ち、「人間力」を活かしつつ、世界の要人と人間関係を構築すべき

1950年代の黄金期

《参考》米国覇権の始まり

1話10分で学ぶ教養動画メディア

10TV

アニメックTV

confidential

第二次大戦や朝鮮戦争を経て、米国はさらに発展し、1950年代に欧州から文化的に独立し、覇権国家へと邁進。

国力	<ul style="list-style-type: none"> ・米国は既に1930年代に最大の債権国 ・1946年から1959年までベビーブーム ・この時期に約7,820万人生まれたとされる ・GDPは50年代を通じてトップ
米国民 (大量生産、大量消費)	<ul style="list-style-type: none"> ・投資ではなく消費がこの時代の繁栄を推進 ・自動車、テレビ、洗濯機、掃除機などが普及 ・GMは年10億ドル以上を稼ぐ米巨大の企業へ ・自動車普及で移動距離が増し、郊外人口が全体の3分の1に上昇
文化	<ul style="list-style-type: none"> ・映画、ロック音楽、若者文化などの文化が定着 ・米国好きにとっては憧れの時代の一つ ・ノーベル賞受賞者最多 ・芸術家も多数輩出

1950年代のノーベル賞受賞者国別比較

米	英	独	ソ連	仏	日本
32人	12人	5人	5人	4人	0人

この時代、米国に対抗できる大国は存在しなかった

す。

アメリカはよく変わる国です。国ごとよく変わる国だと認識することがすごく大事です。今の中国が台頭して、アメリカと中国のはざまの中で生きていくのは、相当な知恵がないと良い目には遭いません。

最後に、参考資料（《参考》米国覇権の始まり）をつけておきました。その中で特に見てもらいたいの、1950年代にアメリカが文化的にも世界で一番になってくるということです。ノーベル賞の数を見ても、イギリスをはるかに抜きます。アーネスト・ヘミングウェイや、平和賞を取ったジョージ・マーシャルが出てきます。映画、ロック、音楽にしても、1940年代から1950年代に欧州が荒廃している中で、世界中から優秀な移民が退去して、ユダヤ人等含めアメリカに入ってきます。50年代以降は文化的にも圧倒的に出てきます。

繰り返しになりますが、アメリカは絶えず発明とイノベーションがあり、一国自体が変わる国です。当然、極端から極端におれる性

質も併せ持っています。そのことを十分に押さえたうえで、中国とアメリカについて考え、それから日本はどうすべきかを考えなければいけません。こうした難しい時代には相当な賢さがないかと感じます。

以上

<参考文献・参考サイト>

- 久保文明『アメリカ政治史』有斐閣、2018年
久保文明『アメリカ外交の諸潮流——リベラルから保守まで』日本国際問題研究所、2007年
齋藤健『増補 転落の歴史に何を見るか』ちくま文庫、2011年
伊藤之雄『原敬 外交と政治の理想 上』講談社、2014年
伊藤之雄『原敬 外交と政治の理想 下』講談社、2014年
福田和也『大宰相・原敬』PHP研究所、2013年
松田十刻『原敬の180日間世界一周』もりおか文庫、2018年
松本健一『原敬の大正』毎日新聞社、2013年
NHK取材班・編『その時歴史が動いた 23』KTC中央出版、2004年
原奎一郎『原敬日記』全6巻 福村出版、1965年～1967年
纈纈厚『田中義一——総力戦国家の先導者』芙蓉書房出版、2009年
片山杜秀『未完のファシズム——「持たざる国」日本の運命』新潮社、2012年
沢沢栄一『沢沢栄一交遊録 アメリカの名経営者と政治家：ハインツ、ロックフェラーからルーズヴェルトまで』（幕末明治研究会：編集）
宮脇淳子『皇帝たちの中国史』徳間書店、2019年
東秀敏『米国論再考』（テンミニッツTV）2020年

東秀敏『1920年度米国大統領選挙』（テンミニッツTV）2020年
伊藤元重「格差の固定化と教育問題」（テンミニッツTV）2017年
齋藤健「ジェネラリストの巨星・原敬」（テンミニッツTV）2014年
田口佳史「渋沢栄一の生涯と教養としての『論語』（3）身分制度への懐
疑と海外での体験」（テンミニッツTV）2020年
谷口和弘「海外M&A成功の条件」（テンミニッツTV）2019年
渡部昇一「本当のことがわかる昭和史」（テンミニッツTV）2014年～
2015年

※以上、敬称略

※なお資料内の画像（出典）はWikimedia Commons(パブリックドメイン)です

【著者略歴】

神藏孝之（かみくら・たかゆき）

1956年、東京生まれ。1980年、早稲田大学商学部卒業。1984年、松下政経塾卒業（2期生）。松下幸之助塾長より直接指導を受ける。1986年、イマジニア株式会社設立、代表取締役社長就任。1996年、株式会社店頭公開。2006年、代表取締役会長兼CEO就任。2009年、東京大学エグゼクティブ・マネジメント・プログラム修了。2019年6月、取締役会長ファウンダーに就任。2022年、公益財団法人松下幸之助記念志財団理事、松下政経塾塾長代理。2023年11月、日本ビジネス協会（JBC）第6代理事長に就任。
